

『おおいしだめとんとむがすあつたけど』

大石田町で語り継がれてきた昔話をシリーズで紹介しします



鬼と豆

昔、昔あったけど。大石田のある所に、爺様と娘の二人暮らしの家があったけど。

或る時、爺様と娘が山の畑に豆まき行ったけど。一生懸命豆まきしていったら、地響をたてで、爺様と娘のいる畑の方に近づいてくる音だけ。

爺様と娘は何んだべーど、豆まきをやめて見ておいたら、大きな鉄の棒もっている化物のような鬼だけ。

爺様も、娘も、びっくりしていったら、鬼は、「爺様、爺様、爺様の娘良い娘になった俺に嫁にけろ。」といったけど。

爺様は、「鬼などに娘をけらんないえ。」といったら鬼は、「よし、けらんないえ、なら、この畑つぶしてやる。」といった。

それでも爺様や、娘に何にもしないで戻って行ったけど。爺様と娘は豆まき終って家に戻ったら、その夜に、又ドシン、ドシンと響がするので、昼間の鬼ではないかと思っただら、家の前に止って、

「爺様の家だなー。娘もらいにきた。」という鬼の声だけ。爺様は、「けらんないえ。」といった。したら鬼は、「又もらいにくる。」といって戻って行ったけど。

明日の夕方又地響をたてで鬼がきたけど。爺様は「けらんないえ。」といったら、鬼は、「この家、とばしてける。」といったけど。

爺様は又「けらんないえ。」といったら、鬼は家を飛ばそうとしたので娘は、

「鬼、鬼、明日俺らの爺様と豆食い競争して、勝ったら俺ら鬼に嫁に行く。負けだら、二度と大石田にきて悪い、どうだ鬼。」といったら、

鬼は、笑いながら「良かんべ、良かんべ、俺が爺様から勝てば、嫁にくるんだな。」

「んだ、負ければ、大石田の地に二度ときてはいけない。約束だ。」といったら、鬼は、「よし、よし、明日嫁もらいにくるぞ。」といって戻っていったけど。

明日の夜になったら、やっぱり地響たてできて、「娘もらいきた。」といって家に入ってきたけど。

娘は、「去日約束した通り、豆食い競争で、爺様から勝てば俺ら嫁に行くのだ。」といって美しい着物着ておったけど。

「サア、それでは、このどんぶりに入った豆を一粒のこらず早く食った方が勝ちだ。」といって同じくらいの量を二ツのどんぶりに分けて、「これは鬼、これは爺様。」といって豆の入った、どんぶりを渡したけど。

鬼は喜んで、俺が勝つにきまっている。と思っておったけど。

そしたら娘は、「ヨーイドン」といったので鬼も、爺様も、豆をどんぶり食い始めだけ。

ところが爺様のどんぶりの方には柔らかく煮た豆が入っており、鬼のどんぶりの方には、かたく火でえった豆が入っておったので、鬼はなかなか食べ方がすすまなかったけど。

鬼は美しく着かぎった、娘の方に気が取られているうちに、爺様の豆は無くなっちゃったけど。

そしたら娘は、「爺様の勝ち。」といった時、鬼はまだ、どんぶりの底に少し残っておったけど。

鬼はそれを見てがっかりしてしまい、二度と大石田には、姿を現すことできなくなったのだ。

それから鬼は、豆が一番きれいなようになったので、鬼を追い出す時に豆をまくのだ。

○出典 滝口 国也／編著 『北村山地方の民話(昔話編二)』

(大石田町 永登 春男／語り)

【町立図書館蔵書】



町の人口 平成31年1月1日現在

世帯数	2,351戸	(+8)
総人口	7,130人	(-2)
男	3,495人	(±0)
女	3,635人	(-2)
(12月中の異動)		
出生	5人	転入 18人
死亡	12人	転出 13人

※この人数は外国人も含めたものです。

楽がき帳

新年あけましておめでとうございます。今年もよろしくお祈りします。

例年になくあわただしい年末年始を過ごしたためか、ついさつき新しい年が始まったと思っただら、新年の目標など考える暇もなく、はや一ヶ月が経とうとしています。年を取ると時が過ぎるのが早くなると言いますが、一ヶ月がもはや一瞬です。ときめきが多いと時間が過ぎるのがゆっくりに感じられるそうです。あと11ヶ月ですが、充実した一年にしたいと思います。(あ)